

新四国巡礼の渡河と行楽

—多摩川と隅田川の事例—

玉 井 建 三 (聖カタリナ大学)

(1) はじめに

都市型の生活姿勢という、都会人の一方的な事情で、川は忘れさられた感がある。川のおかげで暮らしていることも、水にちなんだ生業で活力があることも、現代の暮らし向きからは直視できないようである。しかし、歴史をきざんだ都市には必ずといっていい、その都市を代表する川があり、その川が街の表情と水の文化をよく継承している。河水が澄んでいるときは、まだ街も繁栄するが、河水が汚れてきたとき街は荒廃する。

江戸の人びとも東京の人たちにとっても、川とのかかわりは切っても切り離せない関係にある。多摩川や隅田川、荒川など比較的規模の大きな川から、石神井川、神田川、古川、目黒川など谷戸のせせらぎに至るまで、街中の流れが東京を育て、暮らしを支えてきた。

武蔵野を流れる、このような川によって暮らしが支えられてきた東京の人びとは、川の遮断性という、もうひとつの表情も熟知して、江戸から成長させてきた大都会である。その比較的規模の大きな多摩川や隅田川流域に開創されているのが、弘法大師霊場「四国八十八ヶ所霊場」のミニチュア版で、信仰範囲が一定地域に限られる「新四国霊場」である。流域に移植された「新四国霊場」は、歴史や規模において霊場ごとに異なり、また信仰心に加えて物見遊山目的など娯楽的な要素を持っている場合もみられる。この多摩川^①と隅田川^②流域の新霊場には「四国霊場」の模倣の面と霊場独自の面とがあり、流域の歴史や風土で生まれた多様な文化を基盤に継承している場合が多いことを筆者がすでに報告した。いわゆる「四国霊場」に対して、写しの側面と独自の形式とを兼ね備えたのが新霊場である。

本稿では多摩川流域の「玉川八十八ヶ所霊場」、「多摩八十八ヶ所霊場」、「奥多摩八十八ヶ所霊場」と、隅田川流域の「御府内八十八ヶ所霊場」を事例に、巡拝

において障害になる河川をなぜ挟んで礼所が分布するのか、非日常空間としての渡河と行楽の側面から流域ごとに考察してみた。

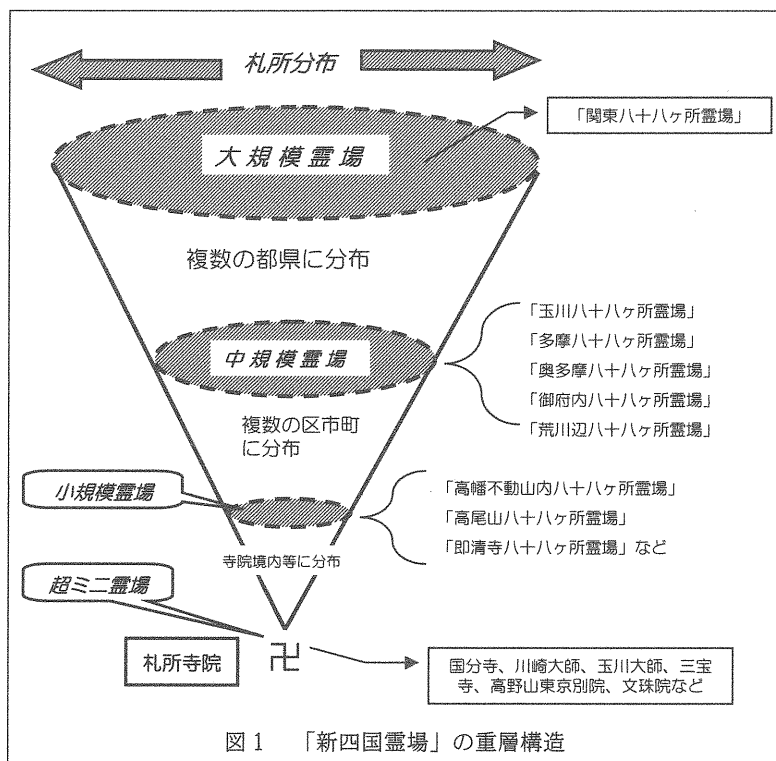
(2) 新四国霊場の構造

川の利水や治水は、地域開発や地域産業の発展に多大の貢献を果たしたが、他方、流域の人びとの川に対する関心を希薄なものにし、川離れの暮らし向きにさせてしまった。川は洪水防止と効率性から、近寄りたくない危険地帯となり、また単に水を流すだけの水路にもなり、流域のダムの多くは水瓶でしかなかった。川はいまや施設化され、地域で暮らす人びとから離れたところで遠隔管理されているのである。

かつての生活空間は現代のように広範ではないが、川とともに暮らしてきた流域の人びとにとって、川は文化伝播の道でもあった。多摩川は武蔵野の文化^③を育て、隅田川（大川）は江戸・東京の文化を育てた。難行苦行性の濃い非日常的空間としての新四国霊場にしても、多摩川や隅田川の両岸に重層（図1）しながら聖域を維持し継承してきたのである。^④

多摩川流域に分布する「新四国霊場」には、「関東八十八ヶ所霊場」、「玉川八十八ヶ所霊場」、「多摩八十八ヶ所霊場」、「奥多摩八十八ヶ所霊場」など、その聖域が行政区よりも広範囲におよび徒歩で数10日を要する霊場から、寺院の境内や数10メートル四方に集めたものまで分布する。

このような、88の寺院で構成された「写し巡礼」地が、大規模霊場の「関東八十八ヶ所霊場」から中規模霊場の「玉川八十八ヶ所霊場」、「多摩八十八ヶ所霊場」、「奥多摩八十八ヶ所霊場」など、そして小規模霊場でも1・2時間で巡拝できる「高幡不動山内八十八ヶ所霊場」、「高尾山八十八ヶ所霊場」、「即清寺八十八ヶ所霊場」などの霊場から、更に規模の小さな超ミニ霊場までである。



また重層構造に加えて、多摩川流域においては中規模霊場の「多摩八十八ヶ所霊場」と「奥多摩八十八ヶ所霊場」の札所の中には、一部重複（8札所寺院）しながら多摩川の右岸と左岸に分布し構成されている場合もみられる。例えば即清寺（青梅市）のように「奥多摩八十八ヶ所霊場」が49番札所、「多摩八十八ヶ所霊場」では51番札所となっており、中規模の両霊場に重複している。

この重層構造と複数霊場が一部重複する構造は田中博が、「甲山新四国八十八ヶ所霊場」において「複数の霊場が互いに境を接しあるいは部分的に重複しており」「小規模の霊場が大規模なものの一部として存在している場合⁶⁾」があることを、すでに指摘しているように、多摩川流域においても同様のことが確認できる。

ところで、流域の中規模霊場の聖域は拝島大師（昭島市）の信仰圏である八王子、府中、所沢、飯能、青梅、五日市を結ぶ線内とも一致する。この信仰圏域がかつての拝島を中心とする経済圏や文化圏にもなっていることを『昭島市史⁶⁾』が記述している。この地域信仰圏は、武蔵野の中規模新四国霊場の信仰範囲と一致しており、また多摩地方における地域社会の機能の一翼をになう圏域にもなっているのである。

一方隅田川流域に分布する「新四国霊場」には、大

規模霊場の「関東八十八ヶ所霊場」から中規模霊場の「御府内八十八ヶ所霊場」、「荒川辺八十八ヶ所霊場」などがあり、更に小規模霊場でも超ミニ霊場の高野山東京別院（港区高輪）や文殊院（杉並区和泉）のように、寺院の境内に集めたものまで含めると、数10の霊場が開創されている。

この重層構造に加えて、隅田川流域においては中規模霊場の「御府内八十八ヶ所霊場」と「荒川辺八十八ヶ所霊場」の札所の中には、一部重複（3札所寺院）しながら隅田川の右岸と左岸に分布し構成されている場合もみられる。例えば「御府内八十八ヶ所霊場」の45番観蔵院（台東区元浅草）は「荒川辺八十八ヶ所霊場」の83番、同じく51番延命院（台東区元浅草）

は82番、更に73番東覚寺（江東区亀戸）は75番の札所となっており、中規模の両霊場に重複している。このように、隅田川は江戸府内に居住する人びとが共有する非日常的空間の一部にもなっているのである。

(3) 川の流通性と遮断性

川は道路や鉄道の発達していない時代においては、川舟によって大量の物資を消費地へ輸送し、また多くの旅人を運ぶ交通の脚にもなった。更には鮎漁や舟遊び、川遊びの場にもなった。川舟による水運は、古来よりわが国の交通の主軸で、流域には川とかわる文化や経済が育成されていた。伐採した材木を筏で流送する方法は、もう半世紀ほどまえにすっかり姿を消してしまったり、川舟で川を渡ることもなくなってしまった。中西悟堂は「夢想家の日」で、昭和30年代のころの多摩川について「ここへは一昨年も釣りに来た。広い河原の拝島の渡船場でリヤカーなどと共に渡し舟に乗った。ぼくは渡し守に、この辺の今年の鮎の様子も尋ねた。⁷⁾」とある。

また、川には文化統一の機能をもった流域文化の流通性に対して、行政区とは異なる遮断性、つまり分水嶺や峠などと同様、自分たちの暮らす空間と異郷との

境界としての意義を有するという二面性も持っている。川が人びとを結びつける役割をもつ反面、一方では「川向こうは別世界」という感覚も持ち合わせていたのである。

川沿いに居住する人びとが、川向（対岸地域）をカワムゲとって、自己の居住地から呼称するもので、このカワムゲとは仲が悪いのが一般的で、子供達は川をはさんで悪口などをいいあい、よく喧嘩した⁹⁰ものだといわれている。多摩川においても同様に、「橋占い」という対岸の子供たちが喧嘩の折のはやし言葉として、「くずはき橋⁹¹」があった。「くずはき」とは、多摩川左岸から対岸の丘陵へでかけて、苗床物、燃料・肥料としての落ち葉を求めてリヤカーや牛車・馬車等で落ち葉を熊手でかき集めることであるが、それを右岸の子供達が橋のたもとではやしたのである。

詩人、河井醉若は『都筑ガ丘から相模野へ』で、「多摩川へ鮎漁に行くひとは、大きい鮎を釣ることばかり思って多摩川を見ない。多摩川などはどう流れていてもよいのだ。また、ただ多摩川へあそびに行くひとは、多摩川さえみればよいので、川の向こうは、どんな風になっていようが、行ってみようともしないで、たいていは川のこちらで引き返してしまう。⁹²」と、多摩川に対して都民がもっている遮断性を記述している。また遮断ではないが、架橋されていて千葉正樹⁹³が江戸名所図会を事例に、隅田川の両国橋図が東西空間の分断（西岸がこちら側、東岸が向こう側で外側空間）という演出があつて、西岸を最上位とする意識を絵図に持ち込んでいることを述べている。つまり、右岸側と左岸側では序列意識もあつたのである。

かつての河川が物資輸送にかぎらず、人の交流や文化伝播の上で大きな役割⁹⁴を果たしてきたが、反面、河川を横切の場合に困難を要し、増水時などには対岸どうしの交流が全く遮断されてしまうことも少なくなかった。河川がもつ、この相反する2つの側面は人びとの精神生活にも色濃く反映されており、この世とあの世、生活空間と異郷など、両者を分けるための「境」とみなす観念もみられるのである。

更に、川を越えることによって、人びとは一大変身をおこす役割も持っているのである。内藤正敏⁹⁵が江戸の中の異界を、三河島の「耳無不動伝説」を例にあげて、江戸を北の荒川（隅田川）、南の多摩川（六郷川）を二大境界としてとらえ、多摩川を越えて江戸の外に出た者が、再び多摩川を通過して江戸に入ることによ

て、遊女という他界の人間に変身し、また浪人に身をやつし、やがて俗人から僧侶に変身するなど、川越が異界（変身）の役割を果たす側面も持っていたのである。この点について、三輪修三が多摩川（六郷川）を「人々はこの川のほとりで、あるいはこの川を越えることで、その再生という心理的な体験を具現化したのであった。⁹⁶」と、やはり境界として認識されることを記している。

先の「川向こうは別世界」という関係ではないが、筆者はかつて離島の小島が、入漁権争いに伴って2藩に分属された例として、高知県宿毛市の沖ノ島を報告⁹⁷した。それによると、沖ノ島は明治7年の行政区の改正まで、母島集落（伊予領）と弘瀬集落（土佐領）に分割され、独自の経済的、社会的、文化的機能を発揮する異質の関係にあつた。この藩政期の分属が、その後の島の暮らしと両集落の本土との流通と文化的関係にも影響を及ぼしていることを指摘したように、小島においてもある意味隣村間の交流が遮断され、むしろ本土との交流が密になってくるのである。

川はその流域に住む人びとに、ときに災害をもたらし、ときに癒しの自然であることに変わりはなかった。洪水から身をまもるために、また河水や川そのものを利用するために、人びとは協力したり、対立して憎しみをぶつけあつたりしてきたのである。⁹⁸川は、それなりに流域に住む人びとの共有する歴史的な癒しの生活空間だったのである。

東京に開創された「新四国霊場」が、渡河の必要性が生じる河川をなぜ挟んで分布するのか。それも、非日常的巡拝において障害になるはずの河川をあえて挟んでの開創である。

「四国八十八カ所霊場」の川は、本来物見遊山の要素というよりも修行的要素をもった苦行（障害物）の濃⁹⁹いものであつた。このことは山本和加子が承応2年（1653）修行僧の澄禅が著した『四国辺路日記』を引用しながら、遍路みちの川渡りについて「泣かされたのは、無常な川の多さである。その数（四百八十八瀬）と吐き捨てるように書いている。雨天の大河は渡し船がなく、上下する輸送舟にひざまずき手を合わせて四時間も懇願しつづけて渡してもらった、その屈辱感。¹⁰⁰」があつたことを述べている。また、佐藤久光¹⁰¹が「四国霊場」の巡礼の道筋（河川）には渡しが見られない場合か、もしくは渡しを整備されていない場合もあつて、遍路にとって障害になっていたことを記し

ている。

このように四国へ上陸しても吉野川や四万十川など、数十箇所の川の路は、かつて「渡し舟」に頼らざるをえなかったのである。更に四国そのものが、四面環海の島国のため渡船を必要とすることから、巡礼費用は木賃と米代に要する費用以外に舟賃の経費も多かった。⁹⁰つまり、渡海船や川の渡しは、元来娯楽的要素というよりも修行的要素の濃いものであったはずである。

勿論「四国霊場」の巡礼者のなかにも、信仰に加えて娯楽的要素も持っていた場合もみられた。例えば文政2年(1819)、遊山半分で四国遍路の旅にでた遍路が、巡礼中に二度も瀬戸内海を船で本州に渡っている。⁹¹一回は松山の三津浜から安芸の宮島を参詣して次の札所の今治の巡拝道に戻っている。次の回は多度津を出て岡山県の下津井に渡り由加神社(倉敷市児島由加 瑜伽山)を参詣してふたたび丸亀に戻っている。これは、江戸後期に物見遊山で巡拝をする庶民ののんきな旅⁹²である。行楽をかねた四国遍路が、巡礼中に本土へ渡るのは、古来より瑜伽山と金比羅宮の両方を参詣する「両参り」といわれる慣習があったからだという。

「四国霊場」の模倣に関して、田中博が次のように述べている。「四国八十八ヶ所の模倣には、土地舞台をひっくりめた四国一大道場全体を複写しようとする努力がみられます。できるだけ四国に地形が似ているところということで、島や半島が選ばれ、それが難しい場合には、風景のよい川沿いや山麓などが新四国の舞台に好んで選ばれ⁹³」ていることを指摘している。後藤洋文も、「海に面して、あるいは河川や湖沼を挟んで八十八ヶ所を配した霊場が多いのは、海辺、吉野川沿いに霊場寺院が点在する四国八十八ヶ所になろうもの⁹⁴」と指摘しているように、「四国霊場」と全く同じ舞台を設定することは困難であるが、常にモデル霊場を意識しながら設定しようとしている。多摩川流域の場合については、川を挟むということが難行苦行に加えて、四国の風光を思い描き、本場の遍路気分近づけ味わおうとする、修行と行楽の両面の要素がある。それが多摩川流域の「新四国霊場」の特徴であることを、次に考察する。

(4) 多摩川流域の渡河と巡礼

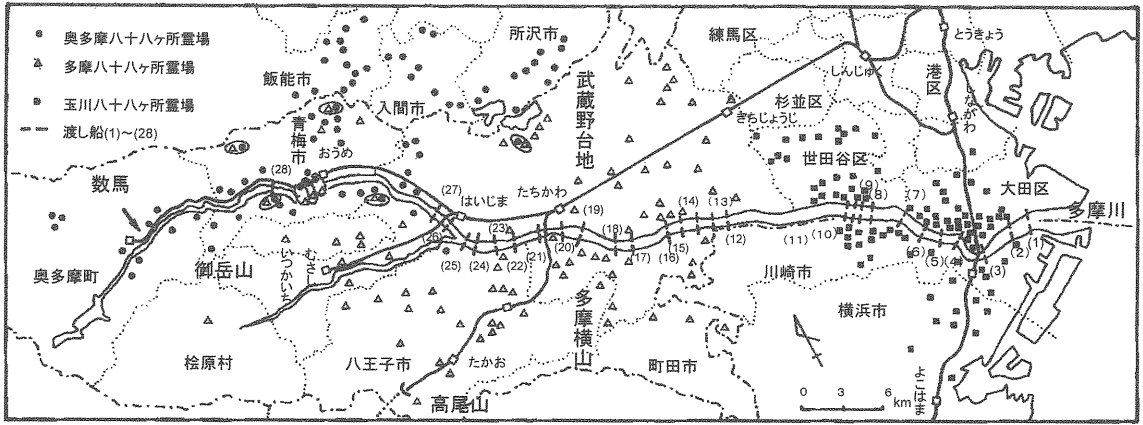
多摩川流域の新四国霊場と川の間をみると、各霊場が開創もしくは整備される昭和10年のころに、多摩

川流域が渡し舟の時代から架橋の時期に入っている。弘法大師1100年ご遠忌にあたる昭和9年当時は、なぜ「新四国霊場」の順路に、渡河の必要性が生じる多摩川を挟まなければならなかったのか。それも、多摩川河口付近の「玉川八十八ヶ所霊場」から、上流の「奥多摩八十八ヶ所霊場」まで、巡拝において障害になるはずの河川をあえて挟んでの開創又は整備された霊場(図2)である。この点については、田中智彦が「四国霊場」において「河川は遍路を行う者が難渋する地点⁹⁵」と指摘しているように、障害物でしかなかった。

まず江戸時代に開創した「四郡八十八ヶ所霊場」を明治中期に改称整備したとする下流の「玉川八十八ヶ所霊場」は、都内在住の巡拝者が1番札所の平間寺(川崎大師)を巡拝するために多くが「大師の渡し」で多摩川を渡っている。この渡しは、明治14年測量の地形図⁹⁶には記載がなく、明治の初期までは下流の「羽田渡船場」か、もしくは大森から巡拝者を乗船させ羽田弁才天へ送り、そこから同船が対岸へ渡河する場合や、又は上流側の「六郷渡船場⁹⁷」を利用していただけと考えられる。それが明治39年測図の地形図⁹⁸になると新たに「大師渡」が設けられていて、昭和12年測図でも「大師渡(新渡)⁹⁹」で記され昭和14年に廃止されている。天保13年(1842)に山田早苗が踏査して著した『玉川浜源日記』に、川崎の平間寺(厄除大師)を参詣した後、多摩川の対岸へ渡るのに「川に添ひて下りて、舟渡しを渡りて、羽田浦玉川弁財天にもうづ。¹⁰⁰」とある。この舟渡しは、前述の測図によれば「大師渡」ではなく「羽田渡船場」を利用したものと考えられる。

このことから、明治中期以降の都内からの巡拝者は「大師の渡し」で多摩川を渡り、¹⁰¹1番札所の平間寺(川崎大師)から打ち始めて、神奈川県内の31番正福寺(5番札所除)までの30ヶ寺、そして81番長松寺と82番観音寺を巡拝して、川崎市高津区諏訪の「二子渡し」で再び多摩川を渡り、都内世田谷区瀬田の5番玉真院(玉川大師)から世田谷区、目黒区、品川区の各札所を巡って大田区西六郷の88番宝幢院で結願している。

「二子の渡し」について、『新編武蔵風土記稿』によれば二子村(川崎市高津区二子)の多摩川は「村の北の方を流る、石川にて川幅六十間余、夏は船渡にて冬の間は橋を架せり、此船渡古より当村の持なり¹⁰²」と、冬場は仮橋や柴橋が架けられるが、それ以外は堤防から川筋までの河原に13軒の茶屋、そばや、料理屋、床場、人力車夫、船大工、材木屋¹⁰³(大正10年ころ)など



渡り船の名称

(1) 羽田 (S14)	(2) 大師 (S14)	(3) 六郷 (M6)	(4) 小向	(5) 矢口 (S24)
(6) 平間 (S6)	(7) 丸子 (S10)	(8) 宮内 (S10)	(9) 下野毛	(10) 二子 (T14)
(11) 宇奈根	(12) 下菅	(13) 上菅 [S10年(12)とひとつになり、S48菅の渡し]		
(14) 押立 (S17)	(15) 常久河原	(16) 是政 (S16)	(17) 関戸 (S12)	(18) 一の宮
(19) 万願寺	(20) 日野	(21) 柴崎	(22) 福島	(23) 大神
(24) 拝島 (S24)	(25) 滝	(26) 熊川	(27) 牛浜	(28) 軍畑 (S14)

※渡しの名称の後に記した (S14) 等の年号は廃止された年、年号のない渡しは廃止年不明 (S昭和、T大正、M明治)
 ※実線 (楕円) で囲った札所は同一寺院で、2霊場を兼ねている

図2 多摩川流域の新四国霊場

川と結びついた商いがある、渡し場は大いに賑わったという。この多摩川の光景が、江戸時代においては「武蔵玉川八景之図⁸⁴」に描かれるほどの風光明媚な癒しの空間になっていたのである。川筋のこの光景は、記録に残っていないが神埼宣武が指摘⁸⁵するように、巡拝者にとっては時代を越えて、物見遊山的癒しの旅気分を味わう格好の水辺空間になっていたのである。

一方昭和9年(1934)に整備された中流の「多摩八十八ヶ所霊場」においては、5回も多摩川を渡り巡拝している。まず調布市国領町の6番常性寺から多摩川を渡り、稲城市矢野口の7番威光寺へ巡拝するには、是政橋と架橋計画が競合するなか、昭和10年に多摩川原橋が開通したものの「菅の渡し」を利用していた。この渡しは稲田堤の桜の花見客、鮎漁・鶺鴒見物客なども渡し、また兩岸の地元民が多摩川原橋を渡ろうとすると数キロも迂回することから「菅の渡し」が昭和48年まで存続⁸⁶する要因にもなった。

次に多摩川右岸の17番真照寺から左岸の18番法音寺に行くには、昭和9年に霊場が整備された当初においては幹線道路沿いにあたるため賑わった「関戸の渡し⁸⁷」を利用しての巡拝であったが、昭和12年に関戸橋が架橋されると渡しを利用しての巡拝者も橋に移ってい

る。

関戸の渡しからは多摩川左岸を49番常福院(青梅市成木)まで巡り、常福院から秩父鎌倉古道を南に下り、「軍畑の渡し⁸⁸」で多摩川を越えるか、もしくは唯一牛馬を通すことのできる日向和田の神代橋(万年橋⁸⁹)を渡って51番の即清寺に至っている。この渡しは昭和14年に奥多摩橋が完成するまで存続した。渡し舟の運航は4月から11月までで、冬季の温水期には仮橋が架けられていた。万年橋とこの渡しは「秩父三十四観音霊場」巡拝者や御嶽道者も利用する信仰の道にもなっていた。

即清寺から、更に右岸を79番龍光寺まで巡拝すると、80番の阿弥陀寺(昭島市宮沢町)を参拝するため、一端多摩川を「大神の渡し」(「平の渡し⁹⁰」)で渡り、再びこの渡しで戻り81番の西蓮寺(八王子市石川町)に巡拝して88番の高幡不動尊で結願している。

更に上流に分布する「奥多摩八十八ヶ所霊場」になると、昭和9年の開創当初から、木造吊橋や木造桁橋等による横断を想定した巡拝行程であった。下流の霊場が渡船による渡河点で本場四国を思い描き通路気分を味わおうとしたのに対して、この霊場は多摩川奥の渓谷美を楽しむ癒しの霊場設定になっている。最初に

多摩川を渡るのが、番外の福生院（福生市熊川鍋ヶ谷戸）から対岸の21番円通寺（八王子市高月町）への行程で、ここでは大正13年に開通した多摩橋（旧吊橋）を渡り、多摩川右岸を上流の奥多摩町氷川まで巡拝し、日原の鍾乳洞からは左岸を青梅市の市街地まで下り、埼玉県の飯能市、入間市、所沢市と巡拝して再び東京都瑞穂町の長岡開山所で結願している。

「奥多摩八十八ヶ所霊場」の癒しの場は御岳渓谷や鳩の巣渓谷など奥多摩の渓谷美に加えて、武州御岳信仰の参詣も兼ねている御師の26番・31番原島家と40番北島家を巡拝することによって行楽気分が味わえたのである。また日原鍾乳洞には12番燕岩と61番籠岩があり、さらに鍾乳洞内には30番の札所があって変化に富んでいる。このように難行苦行巡礼のなかにも、行楽の旅という意識がもてる霊場である。新城常三は江戸の庶民が「平素農閑期の骨休みとして訪れる処は……遠隔社寺ではなく、むしろ日帰り、または一、二泊程度の社寺であった。⁴⁰⁾」ように、奥多摩の流域は信仰に加えて外の世界への欲求と好奇心をみたく行楽の対象となるような場所であった。武州御岳講でさえ、昭和の時代、代参講で継承しながら、反面娯楽集団化しつつあった。その影響からか、例えば小金井市本町の御岳講が消滅した理由に「御嶽山では近すぎるので旅行の楽しみがうすい」「日帰りでいつでもいけるからつまらない⁴¹⁾」ということがあげられている。寺社参詣という信仰を目的とした非日常空間への旅には、「秩父三十四観音霊場」の立地条件の一つに秩父渓谷の自然美があげられる⁴²⁾ように、近世においても、江戸庶民の巡礼のなかには寺社参詣という信仰目的の旅もあるが、「日常生活のしがらみから逃れ、解放感を味わうためだけでなく、風景を愛で各地の名物名産料理に舌つづみを打つなど、……レジャーとしての要素が強くなっている⁴³⁾」ことも池上真由美が述べている。

また、原淳一郎が「近世は名所が神社・仏閣を中心として形成されることが多く、信仰・参詣とのかかわりから「景色」としての「名所」が生まれた。⁴⁴⁾」ことを指摘し、居住空間から解放される絶好の機会として信仰を名目にしているが、実際には山や川などの自然景観や名所旧跡、芝居など物見遊山的な要素をもっているのである。

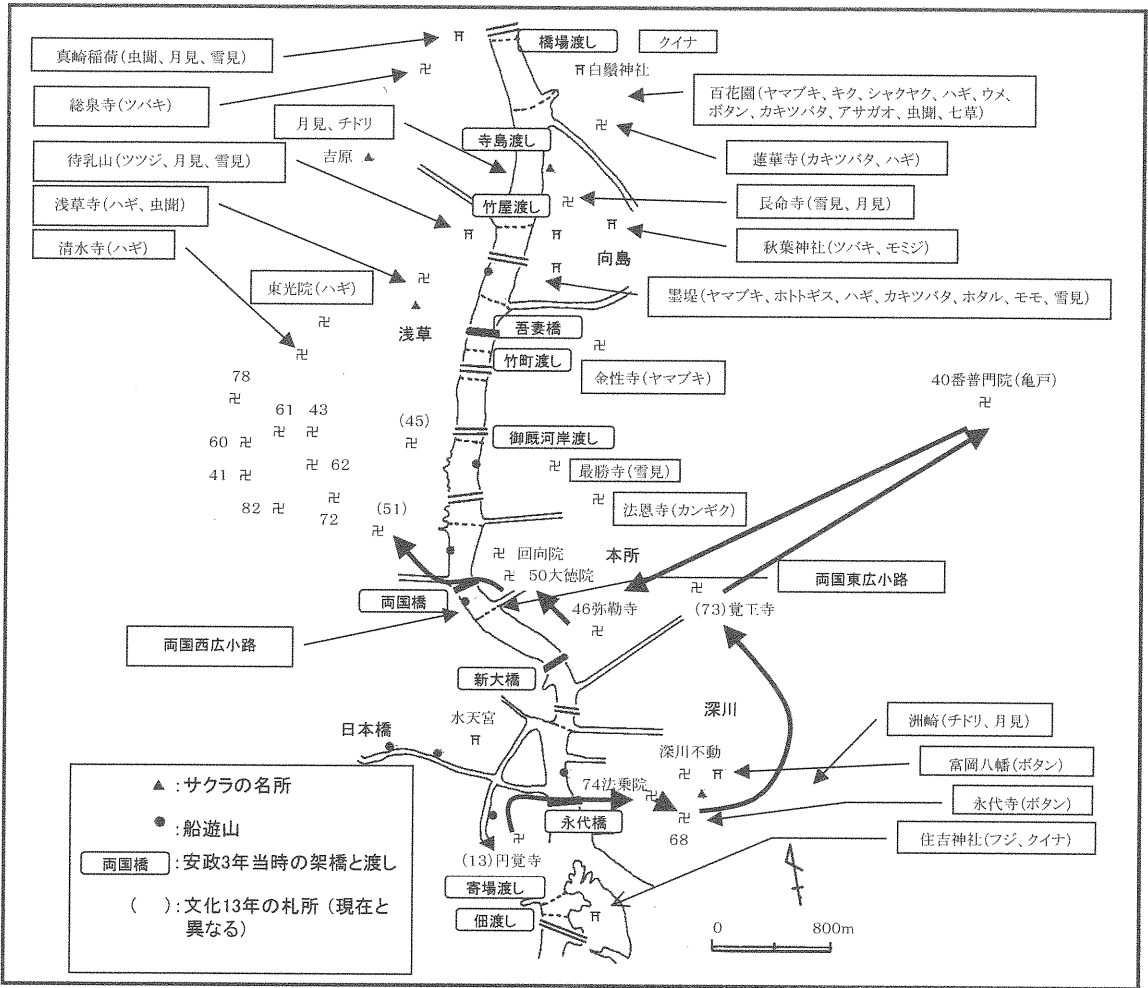
本場「四国霊場」でさえ、稲田道彦が「八十八の寺院だけでなく、四国遍路の巡礼の舞台設定として、自然景観の特徴をうまく取り入れている⁴⁵⁾」と述べるこ

とく、自然を取り込み霊域性を霊場全体に生じさせているのである。北見俊夫⁴⁶⁾も、旅・交通は人と自然との対面という内容をもっていたことを述べている。「奥多摩八十八ヶ所霊場」においても同様で、多摩川下流域の渡しによる巡礼とは異なり、むしろ変化に富んだ武蔵野奥の歴史や自然景観が探訪できる独自の霊場になっていたのである。

この霊場には名所旧跡や渓谷美に加えて、さらに2カ所の番外札所が配置されている。ひとつは福生市熊川の「鯖大師」と呼ばれる福生院で、もうひとつは青梅市長淵の^{とびす}鳶巣川に架かる旧鳶巣橋の「^{とよがはし}十夜橋」である。十夜橋は「四国霊場」の43番明石寺と44番大宝寺の間にある番外札所の十夜ヶ橋（愛媛県大洲市）に因んで配置したようである。しかし、この配置以前から青梅市友田（旧友田村）には8番札所の花蔵院が中心となって「亥子」など民間信仰と結びついた「普門品観音経講」と称する講があり、この大日如来安置所を巡る行事を「お十夜」と呼んで、「お十夜」の行列が旧鳶巣橋まで来ると引き返す（西側の村境）ことから、この橋を「じゅうやはし」と呼んでいた。⁴⁷⁾すなわち、この講の行事と四国の弘法大師「十夜ヶ橋」との関係は元来なかったが、後に「奥多摩八十八ヶ所霊場」の開創者がお十夜の行事を参考に番外霊場として配置したようである。

(5) 隅田川流域の名所と巡礼

非日常空間としての江戸周辺寺社への関心と参詣は、鈴木章生が「江戸周辺寺社に見られるさまざまな魅力は、江戸の人々と江戸周辺とを結ぶ吸引力の役割をはたしていたとともに、名所の対象にもなる条件のひとつでもあった。⁴⁸⁾」と述べているように、時代が異なるにしても多摩川流域の「新四国霊場」の開創の基層に、やはり難行苦行性に加えて娯楽的要素も考えられた。しかし、この苦行と娯楽的要素は、江戸近郊地域への参詣だけではなく、江戸府内（朱引内）をはずとも非日常的意識がもてる「御府内八十八ヶ所霊場」や「荒川辺八十八ヶ所霊場」「江戸六阿弥陀」「三十三観音霊場」などもあり、それぞれの霊場が隅田川（大川）を挟んで札所が分布している。ただ、御府内の場合には多摩川流域の霊場と異なり、江戸を代表する娯楽的要素をもつ名所が巡拝道沿いに存在（図3）していることである。



※名所は「江戸名所花暦」「東都歳事記」による
 ※寺院番号は「御府内八十八ヶ所霊場」の札所番号
 ※架橋の二本線と名称記載のない点線の渡しは安政三年以降の架橋と渡し

図3 隅田川流域の御府内霊場と江戸名所

「御府内八十八ヶ所霊場」の開創については、『御府内八十八ヶ所大意』版木⁶⁰に「宝暦5年3月」と記されていて、この宝暦5年(1755)が開創年とみられる。「荒川辺八十八ヶ所霊場」については天保9年(1838)刊の『東都歳時記』にすでに記されていて、その開創時期は古い。本稿では江戸朱引内を中心に開創された「御府内八十八ヶ所霊場」を事例に、隅田川との関係において考察してみた。

この霊場の札所と順路が記されている最も古い資料が先の「御府内八十八ヶ所大意」(文化13年)であり、それには順番通りの整備になっていない。この札所番号の配置は文化13年(1816)以後においても、大火による寺院焼失がみられるものの、慶応元年まではまっ

たく札所変更・移転がみられなかったことを筆者が報告した。また、文政5年(1822)に十返舎一九が著した『金草鞋 第十五編⁶¹』においても、順番通りではない。このように、江戸の大火によって被災しても変化がみられなかったことから、開創当初から文化13年までの間においても、この順路に比較的類似した配置だったように考えられる。つまり、「御府内八十八ヶ所霊場」の場合は、整備された「四国霊場」とは異なり、希望する札所本尊を護持したいという気持ちが、模倣の実現を困難にさせたのである。

その結果、宝暦5年(1755)の開創当初から現代に至るまでに、江戸の大火・災害、神仏分離令、関東大震災、昭和の戦災などをくぐり抜け、約250年間に札所

寺院の廃寺、寺院変更、寺院移転などを繰り返しながら、31ヶ寺の札所変更と寺院移転が認められたが、しかしそのすべてが明治初期から現在までの約140年間の変化であった。このことから、度重なる江戸の大火を受けながら、江戸時代にはその都度再建されて札所を維持したのに対して、東京に改名される明治以降、寺院変更や郊外移転が著しいことが確認できたし、巡拝道の変化もこの明治以降であることが明らかとなった。

『江戸名所図会』挿図に描かれている88番高野寺境内の巡拝者を識別すると、その64%が成人男性で、28%が成人女性、8%が子供となっている。ここに描写されたすべての人物が巡拝者であるかどうかはわからないが、御府内の盛り場の要素をもった名所よりも、寺社参詣に女性、子供の姿が目立っていることを千葉正樹が指摘⁵⁹している。

ところで、巡拝者が隅田川を渡るには霊場が開創された宝暦5年当時、すでに永代橋と両国橋は架橋されていたから、→⑥7→⑬→⑭→⑮→⑯→⑰→⑱→⑲→⑳→㉑→㉒→㉓→㉔→㉕のルート(図3の矢印)が考えられる。このことから、文化13年の巡拝者が最初に隅田川(大川)を渡るのは、霊岸島の13番円覚寺(文化13年当時の札所)を詣でた後になる。この札所は現在の中央区新川2丁目7番地に存在していた寺院であるが、明治期においては12番地の京橋病院にあった。霊岸島は寛永元年(1624)に埋め立てられた隅田川河口の洲であったが、安永2年(1773)のころ霊岸橋際は俗に蒟蒻島と呼ぶ埋立地で、土地がブルブルふるえて十分に固められていなかった。そこで埋立地を固める意味で、茶店、芝居小屋などを設けさせたため、大道芸人も出て大いに賑わっていた。⁶⁰霊岸島の円覚寺を詣でた順路沿いには、こうした娯楽的要素の濃い場所も存在していたのである。

霊岸島からは、巡拝者にとって水陸2ルートが考えられる。ひとつは元禄9年(1696)にすでに架橋されていた永代橋を渡って深川の法乗寺(74番)を巡拝し、68番永代寺を詣で、その後物見遊山的要素も兼ねた江戸名所、深川不動尊や富岡八幡の参詣と花見などを楽しむ巡拝道であった。また、もうひとつは記録には残されていないが、13番円覚寺の霊岸島からは、永代橋を渡らないで大川筋の船遊山を兼ねて、直接舟で深川へ上陸することも考えられる。いずれにしても大川を渡ることが難行苦行というよりも、御府内の名所旧跡をめぐる名物料理を味わい、レジャーとしての非日常的自己解放に近づけることのできる、遊楽性と行楽性

の要素があったように考えられる。

その後、本所の73番覚王寺から亀戸の40番普門院、そして再び本所の46番弥勒寺から50番大徳院を詣でて万治3年(1660)架橋の両国橋を渡って51番長楽寺(文化13年当時の札所)と巡拝する。そして45番の大護院(現蔵前神社)をへて浅草の寺町へと巡礼するルートである。なお長楽寺は台東区鳥越2丁目の鳥越神社の別当だった寺院である。

この間にも、解放感を味わう物見遊山的要素をもった場所には、深川の料亭・料理屋や季節によって異なるが亀戸天神のフジ、諸国から集められた龍眼寺のハギ、本所回向院の相撲、両国の花火・茶屋、両国広小路の見世物小屋、浅草寺や待乳山の参詣に加えて花見・月見・雪見、更に「寺島の渡し」か「竹屋の渡し」で隅田川を渡り向島へ脚をのばせば、墨堤のサクラや百花が楽しめる百花園、文人墨客が集う風流寺の長命寺やその門前の桜餅、大川の納涼と船遊びなど、四季の自然を散策したり、遊覧することにはこと欠かない名所があった。⁶¹それが隅田川兩岸の非日常的空間としての魅力となっていたと考えられる。

江戸を代表する浅草寺の参詣は勿論であるが、例えば百花園は六義園や後樂園といった藩邸の庭園とちがって、江戸庶民に愛された百花の園である。開園当初は文人から360本の梅樹の寄付をうけ、亀戸の臥竜梅で知られた梅屋敷に対して新梅屋敷と呼ばれていた。江戸の庶民が花園を訪れると、この梅を「梅干し」にして、お茶うけとして振る舞ったという。サクラとちがって、梅は実をつけるため、よけい愛されたのである。更に全国的にも知名度の高い両国橋の東西橋詰は広小路と呼ばれた火除地で、ここが臨時の盛り場から常設の盛り場へと定着していった。この盛り場の人物画像を『江戸名所図会』の挿図でみると、その多くが町人成人男性であり、寺社を参詣する挿図に女性や子供の姿の方が多く描⁶²かれているのと異なる。

江戸時代中期以降、江戸という都市が発展する過程において、隅田川兩岸にこのような名所や盛り場(図3)が設けられたが、江戸庶民にとっては御府内でありながら参詣を理由に、日常生活から解放され行楽に出る絶好の機会となったのがこの巡拝ルートであり、巡礼の魅力にもなったのである。小嶋博巳も利根川下流の新四国巡礼の行事が「広い意味での山遊び・春山行きの伝統に根ざした巡礼行事⁶³」であることを指摘するように、巡礼の基層には遊山気分がひそんでいる



図4 江戸の六阿弥陀巡礼

『江戸名所図会』による

ものと考えられる。つまり、信仰のなかに遊楽がひそんでいるのである。

では霊場を巡拝する季節に関しては、『東都歳事記⁶⁰⁾』記載の「荒川辺八十八ヶ所霊場」をみると巡拝時期を「3月参詣すべし」とあり、また江戸六阿弥陀詣(図4)でも春の彼岸が多い。「御府内八十八ヶ所霊場」の参詣についても3月期に記載されていることから、江戸の多くの庶民は春季に巡拝していたように考えられる。この点について、時代は異なるが星野英紀⁶¹⁾が平成15年「御府内八十八ヶ所霊場」の巡拝者に、14番札所福蔵院でアンケート調査を実施している。それによると、巡拝時期は春季の3月～5月が全体の43.4%を占め、次いで多い秋季の9月～11月の19.6%を大きく引き離している。巡拝者の年齢層については50歳代～70歳代が全体の85.1%と高い。また、その巡拝者の69.0%が都内在住者であることも指摘している。このアンケート結果と江戸の巡拝者や明治大正時代の巡礼の実態が、まったく同様とは限らないが、巡拝の季節は大きな違いがみられないものと思われる。

春の巡拝者にとって、御府内の巡礼は多摩地方にはない、隅田川両岸独自の伝統的な名所と江戸情緒が味わえる非日常空間となっているのである。この川を挟

む江戸名所が遍路沿いに存在したことで、新霊場が連続と受け継がれる要因になったと考えられる。

(6) まとめ

東京における「新四国霊場」の分布は、大規模霊場から小規模霊場まで、それぞれの霊場が重複しながら重層構造を示している。なかでも中規模霊場の「玉川八十八ヶ所霊場」、「多摩八十八ヶ所霊場」、「奥多摩八十八ヶ所霊場」は多摩川を、「御府内八十八ヶ所霊場」は隅田川を挟んで、それぞれ札所設定がなされている。

多摩川流域の明治中期に霊場が整備された「玉川八十八ヶ所霊場」と、昭和9年にやはり霊場が整備された「多摩八十八ヶ所霊場」は、弘法大師1100年ご遠忌にあたる昭和9年当時、多摩川を渡船(渡し舟)によって渡り、本場四国遍路の気分が味わえるよう配置されたものと考えられる。これが本来の難行苦行性に加えて行楽も兼ねて、川を挟んで分布する要因となった。

しかし上流の「奥多摩八十八ヶ所霊場」の場合は多摩川の渡河というよりも奥多摩の溪谷美に加えて、日原鍾乳洞や武州御岳信仰の参詣も兼ねて巡拝することによって行楽気分が味わえたのである。このように苦

行巡礼のなかにも、奥多摩特有の多摩川を取り込んだ非日常空間としての意識がもてる霊場となっているのである。

「御府内八十八ヶ所霊場」の場合は、本来の巡礼のなかに隅田川の水辺空間を取り込み、両岸には遊樂と行楽気分の味わえる江戸名所が分布していて、御府内を出ずとも自己解放のできる巡礼の道を設定しているのが特徴である。

この小論を、藤目節夫先生の御退官を記念して謹呈させていただきます。

参考文献と注

- (1) 玉井建三「多摩川流域における新四国霊場の札所分布」『生活文化史』No.58 平成22年 P 57～70
- (2) 玉井建三「江戸・東京における新四国霊場―「御府内八十八ヶ所霊場」の札所分布―」『愛媛の地理』第19号 平成20年 P 1～12
- (3) 玉井建三著『武蔵玉川における生活環境に関する地誌学的研究』とうきゅう環境浄化財団98 1987年研究成果15巻
- (4) 多摩川流域の新四国霊場と隅田川両岸にみられる「御府内八十八ヶ所霊場」の寺院一覧と巡拝道等については割愛した。詳細は前掲の拙稿(1)(2)を参照。
- (5) 田中博著『巡礼地の世界 四国八十八ヶ所と甲山新四国八十八ヶ所の地誌』古今書院 昭和58年 P 86～87
- (6) 昭島市史編さん委員会編『昭島市史』昭和53年11月 P 1233～1238
- (7) 中西悟堂「夢想家の日」瀧井孝作編『文学に見る日本の川―多摩川―』昭和35年5月 P 153
- (8) 小野寺正人「北上川―民俗」『日本の川―自然と民俗』第2巻新公論社 昭和62年 P 77～78
- (9) 三田鶴吉「文学絵画にみる多摩川の橋」『多摩のあゆみ』28号 昭和57年 P 61
 狛江市史編さん委員会『狛江市史』昭和60年 P 1633～1634
- (10) 河井醉茗「都筑ガ丘から相模野へ」瀧井孝作編『文学に見る日本の川―多摩川―』昭和35年5月 P 47
- (11) 千葉正樹著『江戸名所図会の世界―近世巨大都市の自画像―』吉川弘文館 2001年 P 79～81
- (12) 横山昭市編著『肱川 人と暮らし』愛媛県文化振興財団 昭和63年3月 P 75～100
- (13) 内藤正敏著『江戸・都市の中の異界』法政大学出版局 平成21年 P 6
- (14) 三輪修三著『多摩川―境界の風景』有隣堂 昭和63年8月 P 116
- (15) 玉井建三「高知県沖の島における農業について」『駒澤地理』9号 昭和48年 P 107～116
- (16) 玉城哲著『水の思想』論創社 1979年 p 232
- (17) 元禄年間に著された『四国遍礼霊場記』（寂本原著・村上護訳 教育社新書105 1987年）によれば、本場四国を巡礼する場合、19箇所に海や湾や河川等が記されていて、遍路にとって苦行の場所（渡船、徒歩渡し、仮橋など）になっていたことがうかがえる。
- (18) 山本和加子著『四国遍路の民衆史』新人物往来社 平成7年 P 101
- (19) 佐藤久光著『遍路と巡礼の社会学』人文書院 2004年 P 104～107
- (20) 佐藤久光著『遍路と巡礼の民俗』人文書院 2006年 P 172～189
- (21) 真野俊和著『旅のなかの宗教 巡礼の民俗誌』NHKブックス364 昭和55年 P 123～131
- (22) 由加神社と金比羅宮を参詣することについては、明治7年、埼玉県高麗郡から、伊勢参宮金比羅西国三十三ヶ所参りの行程を記した道中記にも記録されている。（内田九州男編『明治七年甲戌第二月吉日 伊勢参宮金比羅西国三十三所 道中日記帳』愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会 平成22年3月）
 田中智彦「道中記にみる金比羅参詣経路―東北・関東地方の事例―」日本宗教文化史研究 1-2 平成9年 P 34に、古来より瑜伽山は金比羅宮との両方を参詣する両参りといわれる慣習あったから、四国への渡海航路として「瑜伽山への参詣と、丸亀との交通アクセスの面で、下津井よりも田の口と下村」の利用者が多かったことを指摘している。

- (23) 田中博著『巡礼地の世界 四国八十八ヶ所と甲山 新四国八十八ヶ所の地誌』古今書院 昭和58年 P 101
- (24) 後藤洋文「関東地方の新四国霊場」佛教と民俗16 (大正大学仏教民俗学会) 昭和55年 P 16
- (25) 田中智彦著『聖地を巡る人と道』平成16年3月 岩田書院 P 251
- (26) 貝塚爽平監修『明治前期・昭和前期 東京都市地図3 東京南部』柏書房 1996年 P 80
- (27) 『多摩川誌 別巻／年表』P 144には六郷の渡しをへずに羽田の渡し場から川崎大師に参詣することを、川崎宿が宿場衰微の原因になると主張して禁ずるように天保13年(1842)幕府に願い出ている。
- (28) 前掲(26) P 82
- (29) 前掲(26) P 84
- (30) 山田早苗著『玉川源日記』慶友社 昭和45年7月 P 285
- (31) 大田区史編さん委員会編『大田区史』中巻 平成4年3月 P 833~834
- (32) 『新編武蔵風土記稿』第3巻 大日本地誌大系⑨ 雄山閣 平成8年 P 155
- (33) 川崎多摩歴史研究会編『かわさき散歩―道と川と山の歴史をたずねて―』教文研双書57 2002年10月 P 170~176
- (34) 「武蔵玉川八景」は喜多見晴嵐、向ヶ丘秋月、都築丘夜雨、二子帰帆、宿河原晚鐘、世田落雁、登戸夕照、溝口暮雪である。
- (35) 神埼宣武著『物見遊山と日本人』講談社現代新書 1991年8月 P 127~135
- (36) 角田益信「菅の渡し」『多摩のあゆみ』28号 昭和57年 P 53
- (37) 関戸の渡しは中河原の渡しともいい、かつては船橋であったが、関戸と中河原の間に針金を張って往来する馬船の渡しになっていた。府中市史編さん委員会編『府中市史』下巻 昭和49年3月 P 1241~1242
- (38) 米光秀雄「鎌倉古道と軍畑の渡し」『多摩のあゆみ』28号 昭和57年 P 26~29
- (39) 青梅市史編さん委員会編『青梅市史』上巻 平成7年10月 P 942~944
- (40) 明治十五年測図の地形図(貝塚爽平監修『明治前期・昭和前期東京都市地図四 東京西部』柏書房 1996年3月) P 46によれば歩行渡しの浅瀬になっていて、後に冬季より春季にかけては土橋を架橋して往来の便を図っていたように思われる。八王子市や昭島市流域では最も古い渡し。
- (41) 新城常三著『新稿 社寺参詣の社会経済的研究』塙書房 昭和57年5月 P 1134
- (42) 西海賢二著『武州御嶽山信仰史の研究』名著出版 昭和58年4月 P 146
- (43) 佐藤久光著『秩父札所と巡礼の歴史』岩田書院 平成21年9月 P 59
- (44) 池上真由美著『江戸庶民の信仰と行楽』同成社 2002年4月 P 11
- (45) 原淳一郎著『近世寺社参詣の研究』平成19年9月 思文閣出版 P 174~180
- (46) 稲田道彦「四国遍路の巡礼路の景観の特徴」愛媛大学『四国遍路と世界の巡礼』2005年3月 P 60~62
- (47) 北見俊夫著『旅と交通の民俗』1977年4月 岩崎美術社 P 45
- (48) 小川秋子「十夜橋と旧調布村の伝説」青梅市郷土博物館 青梅市文化財保護指導員連絡協議会活動報告書 第21号 平成18年3月 P 58~67
- (49) 鈴木章生著『江戸の名所と都市文化』2001年3月 吉川弘文館 P 223~224
- (50) 台東区教育委員会：『御府内八十八ヶ所大意』版木(台東区文化財報告書 第23集) 平成9年
- (51) 十返舎一九著『金草鞋 第十五編』十返舎一九全集 日本図書センター 昭和54年 P 558
- (52) 前掲(11) P 278
- (53) 玉井建三著『江戸・東京のなかの伊予』愛媛県文化振興財団 えひめボックス24 平成15年3月 P 43~48
- 田村栄太郎著『銀座 京橋 日本橋』江戸東京風俗地理 第2巻 雄山閣 昭和40年 P 168~176
- (54) 前掲(53) 拙稿 P 184~191
- 山本光正著『江戸見物と東京観光』臨川書店 平成17年2月
- (55) 前掲(11) P 270~285

- (56) 小嶋博巳「利根川下流域の新四国巡礼—いわゆる
地方巡礼の理解に向けて—」 成城大学文芸学部
成城文藝 第113・114号 1985年 P155
- (57) 『日本名所風俗図会』3巻所収 角川書店 昭和
54年 p 203～204
- (58) 星野英紀「大都會の新四国霊場—御府内八十八ヶ
所霊場の実態—」宗教学年報25 大正大学宗教学
会 2005年3月 P 1～15